

アミジ

サイ

H.カズユキ

少年

車を走らせていると、目の前の丘にアジサイの花が広がった。梅雨明けの暖かい、いや、むしろ暑い日だった。紫、ピンク、白の花々が濃い緑の葉に栄えている。窓から流れ込む風にも、アジサイの香りがうつっているように感じた。

手前の信号につかまった。ゆっくりと花を眺めた。よく見ると、控えめだが旗が立っている。「あじさいまつり」

丘に見えたのは公園のようだ。なんてことはない。駐車場もちゃんとある。ぼくは寄り道をすることに決めた。

砂利の駐車場に車を止める。走っていないと、熱気に攻め寄られる。助手席に置いてあるカメラを持つと、暑さを避けるように丘へ上がる。丘の上には細い道があり、両脇を夏の桜が葉を茂らせて並んでいた。緑の中に入ると心も涼しくなる。向こう側には小川が流れていた。雨が降ると水位が増すのだろうか。ぼくが立つこの場所は堤なのだろう。

アジサイは堤の斜面を飾る。日の光を受けて、綺麗な姿を僕たちに誇る。時間が早いせいか、それほどひとはいない。まばらに、散歩を楽しむ老人や、犬を連れた夫婦、花を愛でるよりも他のことに気が行っている幼い兄弟、ゴツい一眼レフと三脚を担いだおじさん。思い思いにまつりを楽しんでいた。きっと、花に惹かれたのだろう。ぼくと同じように。花はこのひと達の思いをどう受け止めるのだろうか、などと、花の気持ちを想像してみる。もちろん分からなかった。

ぼくもカメラを取り出して、ファインダーから彼らを覗く。さっきのおじさんほどゴツくはないが、ぼくも一眼レフを持っている。同じデジタルカメラだといっても、コンパクトデジカメと一眼ではやっぱりできることが違う。被写界深度の調整や露出もそうだ。だが、一眼とコンデジのもっとも大きな違いはレンズを変えられるかどうかだと思う。一眼は超望遠、魚眼、はたまた、最新の防滴レンズから放射能レンズまで使える。昔のレンズにはトリウムという放射性物質が含まれている。多いものでは毎時六ミリマイクロシーベルトも出す。政府が決めた年間二〇ミリシーベルトなど、悠々超えてしまうのだ。

ぼくが今つけているレンズも、放射能は出ていないと思うが、多分、オールドレンズの部類に入る。マニュアルフォーカスだ。

だから、ファインダーから斜面を覗いたとき、はじめは磨りガラスの向こうをみているように、淡い花の色が視界に滲んでいた。レンズの胴をグルグルと回す。徐々に視界は鮮明になり、景色は四角に切り取られる。斜面に立ち、左半分にアジサイを、右半分は小川と空を。

「おじさん、なにやってるの？」

唐突に子供の声がした。すっと胸が詰まる驚きとともに振り返る。真横に小学校に上がったばかりくらいの男の子がいた。大きな瞳でぼくを見上げている。まるで気配を感じなかった。足音一つ聞こえなかった。

「写真撮ってるんだよ」

「失業してるの？」

「……うん。失業もしている。でも、今日は休日だぜ。知ってる？ 休日と平日の違い？」

「じゃあ、友達だね。ぼくのパパも失業してるから」

あまり嬉しくない友達だが、少年が純粹無垢な笑みを浮かべるので、

「ああ、友達だ」

と思わず答えてしまった。やっぱり、ぼくは大人なんだ。

「おじさん、写真撮るならいい場所があるよ」

「なあ少年。ぼくはこれでもまだ三十代だ」

「まだまだ。第二の人生があるじゃない」

少年はにこやかにいうと歩き始めた。ぼくがついてくるのは当然だというふうに。

第二の人生か。まだ、第一の人生が始まったばかりだと思ってたのに。子供のいうことだ。どこまで分かっていっているのか。それでも、ぼくは、この第一の人生で一体なにをしたいのだろうと、ふっと真に受けてしまう。

どこからか、集団の笑い声が聞こえた。大勢がなにやら話している。茂みの向こうに集団はいた。みんな麦わら帽子をかぶり、鋏やら小刀を手にしている。初老の男達だった。女性も何人かいるようだ。

「では、みなさん。暑いですからね。水分補給をこまめにしながらやってください。分からないことがあったら経験者に聞いてくださいね。適当にやらないこと」

また笑い声が起こった。そして、思い思いの方角へ散っていった。

「やばいよ。急がないとね」

少年がいう。

「どうして？」

「彼らは花摘みのボランティア」

アジサイは花が咲いているうちに剪定するという話を聞いたことがあった。しかし、実際目にするのは初めてだ。この咲き誇った花たちが一斉に枯れたら、それはそれで壮観だろうが。

散らばった数人はさっそく花を切り始めた。みるみる緑の茂みから色彩がなくなっていく。この光景も撮っておきたかったので、立ち止まり数枚写した。

「写真好きなの？」

「え？ うん。好き、かな」

「なんで？」

「写真に写す景色と、目で見るとは別物だよ」

少年は、わからない、という感じで振り向いた首を傾げた。

「絵に描いた景色と、目で見るとは別物でしょ？ 写真も同じ。目はカメラの代わりにはならない。カメラが目の代わりにならないように」

「だから、おじさんは二つの目を持っているってことか。ああ、三つの目か。目が多いのはいいことかもね」

「しかもカメラは一台じゃない。レンズも一本じゃない」

「おばけだ」

体中が目の妖怪がいたような。子供の頃に漫画で見たのを思い出した。

「おばけか。写真の魔力はおばけの仕業かも。息をのむ美しい風景も、撮ってみるとなんの感動もない画像になったり、変哲のない街が魅惑的に写ったり、カメラの目は、ぼくとは違うんだなって思うことがある」

少年はまるで、ひとがそれぞれ嬉しいことや怒ることがちがうのと同じように、といたげに、ぼくを見やった。

「着いたよ。ここ」

公園の一番端まで来たらしい。堤から降りると、天然の屋根のように、大樹が木陰をつくっていた。さらに、くぼみのようなところがあった。フォトスタジオ程度の広さだった。両脇にアジサイが迫る、天然のフォトスタジオだ。少年はそこを指さす。日光は柔らかく葉で防がれて、頬を吹く風だけが、ゆっくりとぼく達の間を流れていた。

ぼくがカメラを向けるとき、そこになにかを感じてカメラを向ける。でも、この場所は、カメラを向ける以上のなにかを感じた。そして、なにかが足りない。

「写真撮らないの？」

悪戯っぽくいう。

「撮るよ。撮るから、そこに立って」

少年は嬉しそうにスタジオの中心でピースサインをする。

丁寧にピントと露出をあわせて、一枚だけシャッターを切った。ちゃんと撮れているか液晶パネルで確認する。写っていた。露出も問題ない。拡大してピントがあってるか確かめた。こっちもばっちりだ。よく写ってる。

いい写真が撮れたので、嬉しく思って顔を上げると、少年の姿がない。三百六十度、見回したが見あたらない。堤に登って探したがいない。どこかに隠れているのだろうか？

「おーい」

呼んでみたが、ぼくの声はむなしく風籟に消えた。返事はなかった。それに、彼が隠れていると、正直ぼくは思わなかった。現れるときも突然なら、消えるときも突然だ。

駐車場に戻る道、アジサイは地面に咲いていた。おじさん達は手際よく、アジサイの花を落とすしていた。ぼくは踏まないように注意して、こんな光景を楽しみながら車に戻った。

車のエンジンをかけたとき、帰ろうと決めた。旅の目的は帰ることだ。さっき撮った写真をちゃんとモニターで見たかった。ぼくはアクセルをふかして、来た道に戻った。

家のパソコンで撮った画像を開いた。少年がピースをしている。大きな目を細めて笑っている。その時、強いデジャヴにおそわれた。ぼくはこの景色を知っている。いや、この写真を知っている。そうだ。この写真はぼくで、ここに写っているのはぼくなんだ。この写真を撮ったのは父親で、カメラは違うが、レンズはこのレンズだ。もうアルバムなんか残っていない。でも、この写真は覚えている。

写真を思い出すと、その時の光景も頭によみがえってきた。両親がいて、妹がいて、家族はスカイラインに乗っていた。オートマじゃない。マニュアルだ。暑かった、アイスを食べた、アジサイが咲いていた、そして、しあわせだった。

「そういうことか」

ぼくは独りごちた。

カメラをやる人間なら、写真は真実を写さないことを知っている。ここに写った少年が現実か幻想かは分からない。

ぼくはカメラを手に取り、ファインダー越しにモニターを覗く。胴をグルグル回すと、次第に視界は鮮明になり、さらに回せば、また景色は溶け出すのだった。

アジサイ少年

<http://p.booklog.jp/book/39179>

著者：H・カズユキ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hkazuyuki/profile>

ブログ：<http://ameblo.jp/h-kazuyuki/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39179>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39179>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.